

# 事実からの出発

「もし、神が我々に主人公を与え給うたとすると、必然性と事件がそれである。」パスカル「パンセ」より

小 林 幹 夫

## 1

「事実の強さ！」、これを私達は、哲学の一つの出発点にとってみよう。

自然科学を例にとれば、今迄のニュートンの自然観に、マイケルソン、モーレーの実験が示し出した驚きや、光量子の波動と直進がもし出した矛盾に直面した当時の科学者達の当惑。人生を例にとれば、人の一生に数回は必ず現われる絶対の事実によって、私達の今迄辿って来た人生観や、これまでの人生設計や計画をいやが応でも変換を強いられるような場面。

事実の絶対の強さ、事実の恐ろしさ、時に事実の啓示のようなありがたさ。これにも、その時直ぐ反応しないと生死に関わるような危急の時もあり、また、大きく静かに見渡して、次の思索と行動を決定できる余裕のある時と、いろいろの場合がある。しかし、事実の強さ、そのものの否定しがたい絶対性と、それを認めざるをえない冷厳さには変わりない。

だが、一口に事実といっても、その事実は一つの出来事のこともあり、一つの状況のこともあり、一つの人との出会いのこともあり、一つの証言や証明や実験のこともあり、また、ただ一個の物のこともあり、一つの愛の対象であり生き甲斐を与えるものこともある。または、それ等の幾つかの組合せのこともある。要するに、私達が今ここで事実と言おうとするのは一方で大きな価値転換や認識転回を強いるものであり、一方で速度の時宜を逸したり、その正確な判断を誤ると、重大な結果を招いてくるものを、ひっくるめて、事実の強さと言っておこう。

事実自身は、このように即今性、すなわち、ただ今、その場の現実即応性を強調するものを持っているのであるが、私達は、一応退ぞいて、事実が与えるものを冷静に分析してみる必要がある。事実はここで、何等かの意味で、私達に否定転換を強いるものであり、断固たる一つの否定を通して、別の次元に立たせるものである。事実はここで、先入観や偏見、狭い自己だけの見方から、新しい地平線上に私達を呼び出してくれる冷厳な神に近いものでさえある。

かといって、事実をめぐる思索の糸を辿った人は、私達だけではない。いや過去の哲学史を省りみる時、殆んど枚挙に暇もない程多いのである。例えば、ライプニッツの充足理由律、現象学者の「事実自身へ」の合言葉、ヴァイトゲンシュタインの事実と観念の相応のことばの哲学、事実を事実の存在と言い直す存在論とも考えうるし、そのほか、マックス、シェラーの状況価値、偶然性の問題、東洋的には、朱子学の「致知格物」の人格完成の要求、マルティン、ブーバーの出会い、等々、殆どきりが無い程、私達は事実をめぐる思索の例をあげることができる。その各々の哲学者が、事実を哲学の出発点としなが

## 事実からの出発

らも、それぞれの視点、立場によって、哲学は大きく分かれて来たと言えよう。そこで、今、私達は、どういう視点と立場に立って、どういう方法をもって、これをとりあげるかが、問題になってくる。

ここで私達は、古来、哲学の常識ともなっている、**Essentia**と**Existentia**、本質と存在者の間の問題を思い出す。本質が何であるかは、各哲学者によって違うので、これは暫くおくとして、存在者（ドイツ語で **Seiende**）は、物、事、人の三者と言える。我々は人生途上で、物を使い、事件に出会ったり、事を行ったり、人と離別遭逢して生きている。事、人、物の背後には、当然、時間空間を考えねばならないので、時間的には時代、機会、一瞬間の危機、決断の時などが考えられ、空間的には状況、人の属している集団、その場の人間関係、世界、社会なども考えられる。

哲学は、この存在者を通して本質に到達しようとするか、存在しているものを超越して本質に帰一しようとするか、また逆に本質から還帰して存在者のあるべき姿を把握しようとするか、または一挙に存在者と本質を同時に把握しようとする。例えば、西田哲学では、本質が場所的一般者であり、そこから存在者は自覚的に限定されてくるのであり、ハイデガーの「存在と時間」では、存在者に近い物体化された人間にまで墮在している現存在のあり様とその時間性が問題であった。存在者を把握する方法論と、本質とは何かの設問が、各々の哲学を弁別する岐れ路になっていることは、こうした例をもってしても了解できるであろう。

しかしながら、私達が西欧の伝統的哲学を省みるとき、「事実」よりも「存在」と言った方が、より包括的であり普遍的であることに気づく。また本質を先にとり出して、そこから、事実へ下ってくるのが順当ではないかとも考えられる。またある人は、事実と言わずに何故現象と言わないかとも反問するかもしれない。事実はフッサールの言う現象の中に含まれることは、言を俟たないが、フッサールの言うように現象と決めてしまうと、それは実はその場でもう一種のカント流の観念論に陥る危険性をもっている。同時に例えば交通事故直前の運転する人の数秒の差で生死に関わる緊急の場合などの、二十世紀のスピード時代には、現象と言うことばは、十九世紀末から二十世紀初めへかけての認識論だけの精神的風土をもうとっくに通りすぎてしまっているからでもある。

そういう意味から、我々は事実から本質をみぞそうとする。しかしながら我々が現象学を詳細に観察すると、存在論と現象学は一つのことを両面から見たにしかすぎないのに気づく。（Vgl. Heidegger: *Sein und Zeit*, S. 38）

私達は事実から存在を解釈し、事実から現象たる所以を明らかにできないかと考えてみることにする。また、私達東洋人の東洋思想から考えても、本質や現象よりも事実を先にあげる考え方の習性がある。

例えば朱子学の知識を深めて人生全般の道理に到達すると言う意味の「知を致して物に格る。」である。ここで「物」とは単なる客観的な物だけを指すのではなく、人生全般の事象、事件をも含めている。そういう人生上の認識論の目指すところが、ヨーロッパではどこまでも認識と理性の延長上に求められていたのに反して、東洋では認識論を出発点として一つの明德をもった理想的人格をみぞしているところが、西欧の人と東洋人のものの考え方が違っているところである。しかし、陽明学では、朱子学が知と言うものは後天的に生まれるとしたのに反して、知は先天的良知であるとし、格は正すの意義をもち、本来、「大学」の中にあつたこの語を陽明学風に変容して、物とは意のあるところとし、

## 事実からの出発

「大学」の志すところは、誠意をつくすところにあるとした。日本の古学派の荻生徂徠は、物を大学の教科である六芸であると説いた。このように同じく「物」と言っても、ヨーロッパの伝統の個物、ギリシャ的には基体が論理学から生まれた用語であるのに反して、朱子学の伝統の物とは事象又は人生上の事実と言える。我々は朱子学のこの伝統をも参考にして我々の出発点の考えの中にとり入れてみることにする。

事実は、それにしても、やはり、広い外延をもつ概念である。事実は生産された物となるとマルクシズムにつらなり、事実を命題と記号に直すと論現実証主義の問題となり、事実を通しての認識とするとプラグマティズムとなり、事実はそのまま現象でもあり存在でもあるから現象学と存在論にも連なる。事実は時に状況にもなり、事実はそのまま情報でもある。

人間が事実はどう対決するか、これは哲学の入り口として、決して狭すぎる門とは言えないのである。

それにしても偉大な思想は、いつでも過去の哲学と訣別するところにしか生れない。カントのコペルニクス的転回、ニイチェの価値転換、マルクスのヘーゲルを逆立ちさせること等々、あげればきりが無い。

私達が、事実を哲学の出発的としながら、そこに、どう云う新たな方法論をうち出そうとするかは、我々の論考を通じての宿題としておき、我々は謂わば、各論を一つの実験場としながら、そういう方法の検索につとめようとしてみることにする。

## 2

しかし、こうした広い意味での事実には、一方で当然その背後に西欧哲学の伝統の存在や倫理や生の価値や実存が予想され、一方で、これも当然のことながら、我々の目ざしているのは、事実についての「学」であると言うことに留意しておかねばならない。この二つの方向は、事実を軸として考察すると、私達に計画変更を強いる強制者としての事実、つまり我々人間存在を脅かすものと、一方で又、事実に関する普遍的思考方向を指し示すもの、つまり学の方法論の問題に帰着するものとの二つに大別することができよう。前者は人間学に関わり、また実存の問題提起者とも見られ、後者は狭くは論理と思考方法の問題と見られ、学のあり様の問題と認識論の方法論に関わってくる。事実についての視点を、私達はこの二つの観点にしぼって考察を進めてみよう。

とりあえず、私達は、今述べた後者の問題、つまり「学」のあり様から考えていこう。そうすると、私達はあの厳密な現象学としての哲学を一生涯つくり出そうと努力し続けたエドモンド・フッサールを思い出さずにはいられない。

エドモンド・フッサール (Edmund Husserl, 1859—1938) の残した課題は、非常に大きい。彼自身の著作集も、その弟子の一人H, L, V, ブレーダ等によって極く最近やっと公刊されるようになって、今迄目の目を見なかった彼の遺作がいろんな角度から見直されている。しかも、彼の弟子、又は彼自身の唱えた現象学から出た幾つかの学説を省く時、ヨーロッパ大陸における二十世紀の哲学の中心的問題を、彼は残して逝ったと言える。

例えばハイディガーの実存主義と存在論、マックス・シェラーの人間学、サルトルの実存主義とマルクシズムとの相関、またヴィンスバンカーなどの実存分析による精神医学、オスカー・ベッカーの美学や数学の理論、数えあげるときりが無いが、いずれもその方法

## 事実からの出発

の淵源はフッサールにあるといえる。

かと言って、私達自身が実際にフッサールの著作の中の一冊を引き出して読んでみると、ある部分は他の作品の中にある繰返しであったり、厳密さだけを要求する退屈さや、フランスの哲学に較べてドイツ哲学一般にある難解さにいやになったりする。そして何よりも、もう彼の死後三十数年もたっているのに、ある部分は陳腐になってしまっているところさえある。私自身は決して何から何まで、フッサールの哲学を肯定しているわけではないのである。

けれどもまた、少くとも現代の視点に立って、哲学を考える人にとって現象学とそこから発った流れを無視したり、軽視したりすることは決してできない。我々はこういう観点に立って、まず、フッサールの残したぎりぎりの方法は何だったか、そして、それはどのような発展を遂げたかを反省してみるところから、私達のフッサールに対する注目の糸口をときほぐしていこう。

フッサール哲学の特色は、彼の認識の方法論にある。少くとも次の三点が、彼の哲学がかかげた旗印と言えよう。

- (1) 事実自身へ、(Zu den Sachen selbst!)
- (2) 厳密な学としての哲学の方法論の確立。(これが、彼の現象学でもある。)
- (3) 哲学は方法として現象学、対象として存在論をとりあつかう。

この彼のかかげた要請は、彼の生きた十九世紀後半から二十世紀始めにかけての、時代的、歴史的背景に裏づけられている。事実自身へとは、ヘーゲルのドイツ観念論への抗議であり、厳密な学としての哲学の方法の確立は、彼と殆んど同時代人の新カント学派の人達への自己の方法の闡明であり、また非ユークリッド幾何の発見、集合論の矛盾、量子論、相対論の発展などの自然科学自身の花々しい発展と同時に、その基礎や方法への懐疑が続出している時代の背景をも考え合わせることができる。彼は、そういう時代に心理学と数学の方法から彼自身の現象学を産み出して行ったわけであるが、現象学が唯一の正しい認識の方法であるとする、当然その帰結として、対象としての存在が問題となってくる。しかし、この存在論もフッサールやハイディガーを待って問題となって来たわけではなく、遠くギリシヤのアリストテレスの形而上学以来の人類への課題だったと言える。ただ、そのとりあつかい方が、フッサールやハイディガーではそれぞれ独自の考え方をとっていたのである。

## 3

我々はまず、問題をアリストテレスから始めてみよう。

彼は断定的に言う。「普遍的なものについてのみ学があり、特殊なものについてのみ存在がある。」特殊なもの<sup>ウーシア エッセンス</sup>の存在は、アリストテレスでは、実体＝本質の意味に解せられるから、本質を把握するのは理性(直感知, nous)の役割である。それに反して、論理や思考つまり、ロゴスの役割は、実体としての存在を普遍、類として捉えるところにある。ここに彼の論理学が生まれ出る所以があった。しかもあるゆる存在するものが、統一的にロゴスの説明の中にとり入れられるのは、属性の相違にもかかわらず、類比の作用が我々に与えられていたからである。論理学の創始者としてのアリストテレスは、こうして、質料因、形相因、始動因、目的因の四つの原因による因果律と、<sup>デュナミス エネルゲイア</sup>可能態と現実態の二つの態による変化と運動から自然を考察した。

## 事実からの出発

しかしもし、特殊なもの個物の存在が、アリストテレスの言うように学になりえないとすると、個と普遍は分離したままに終る。個物の存在性は、これを最も尖鋭的に特殊化し、極端化して想定した時、これとしか指示しえないことになる。それは普遍化も類比も許さない。それは記述にとどまり、その現在性は指示しえても、それが比較考量をどこまでも拒絶する場合、我々の過去の経験や体験や想像からさえ、出てこないような特殊化された個物だったと仮定すると、それは指示、記述、記憶に止まっていて、判断も考量も推論もなしえず、まして他の物や事を引合いに出しての説明も不可能なことになる。

しかし、いかなる個物も、それが存在している限り、その現在性だけはもっているはずである。こうしてアリストテレスでは、個物を現在化せしめている現実態としての本質が考えられると同時に、絶対に普遍化を拒む特殊性は、そのまま一つの欠如態として与えられる。そうすると、この可能態たるべき質料の現在とその不在を繋ぎとめるものが、何であるかが当然問いただされねばならぬ。それが、外ならぬ実体 (ousia) だったのである。こうして、G・ロデイエも言うように、「完全な存在者とは実体である。そして人がその存在性を肯定する他のすべてのものは、ousia の外延のうちにその種としてあるのではなく、ousia の内包のうちにその部分としてあるのだ。」かくてousia は動かす内在であり、同時に欠如する超越と云うことになる。(J. Brun. *Ahistote et le Lycée*, 有田訳, P128. 猶、このアリストテレスに関する論考は、大部分、同書の所説の引用か、またはその論拠に拠っている。)

アリストテレスの自然に関する教説は、経験に根ざすものであり、経験から自然、存在そして神(形而上学では思惟の思惟、自然学では第一動者)について論理的に考究した彼の学者の態度は、現代の我々にも学ぶべき多くの点をもっているが、よく言われるようにそれは自然を彫刻の造形と博物誌の二つのパターンから考察したものであるから、現代の自然科学的世界像を知っている我々には、素朴にすぎる嫌いがある。しかし、この学説は聖トーマスを通じて中世の自然観を長く支配し続けた。この中世的の自然観をまづ破ったのが、周知のようにガリレオ・ガリレイであった。

アリストテレスの経験論的、生氣論的、目的論的な自然学は、17世紀のはじめに物理学の数学化と実験と測定の方法論に破れ去った。ガリレイは、アリストテレスと違って、なぜ落ちるかではなくて、どのように落ちるかを問題にした。アリストテレスの可能態や現実態の見方や目的論的自然観は、デカルトによって捨てられ、物体の運動は代数で定義され、やがて起るニュートンの質点力学の誕生を準備する。

ここで注目すべきことは、アリストテレスの哲学では、特殊の個の存在を普遍化するためにousiaが必要であり、その思考的手続きが外ならぬ<sup>オルガノン</sup>論理学であったのであるが、ガリレイ、デカルト、およびニュートンの自然科学では、個「物」よりは、物の落下や運動と云う「事」の人間の側のとりあつかい方がそのまま力学の誕生となったことである。こうした方向から、我々はフッサールの現象学に接近して行こう。

フッサールは、その比較的晩年の著作「ヨーロッパの学問の危機と先験的現象学」の中で、ガリレイを発見する天才であると同時に、隠蔽する天才であったと言っている。ガリレイの発見の天才については、今更ここで述べる必要はないであろう。科学史と彼の著作が明瞭に彼の天才を語ってくれているからである。ガリレイはフッサールの観点からすると、一体何を隠蔽し、何をとり残し、何を長い歴史の暗闇の中に置きざりにしてしまったのだろうか。ここで断罪されているガリレイは、決して「天文対話」や「新科学対話」

## 事実からの出発

で宗教裁判を受けているガリレイではなく、方法としての現象学からの究問と断罪である。換言すると、フッサールの意味での根元的な幾何学を、つまり理念化された幾何学を、理念化されうる、より多産な自然を、ガリレイが学以前の直観的自然にすりかえてしまったという点にある。もう一度言い直してみると、理念的なものを創造しうる構成作用という、客観的規定の方法としての「数学」と「幾何学」を、ガリレイは狭い経験の実験と測定に限定してしまった点にある。

中世以来のスコラ神学の自然観は、謂わば始めに神学による自然観の結論が決められていて、それに解釈をほどこすだけだったとすれば、ガリレイの発見は、仮説から実験を通して、それを確かめる正しい推論の仕方とその帰結と言えよう。ところが、フッサールはその仮説からの推論に百尺竿頭一步を進める。

彼は言う、仮説はそれが確証されるにもかかわらずいぜんとして永遠に仮説であると。確証は無限への歩みであり、無限へ向っての確証であり、それが自然科学の固有の本質であり、この「無限に」と云うことこそ、幾何学が始めて歴史の世界にもちこんだ、独特の帰納法という恒常的な形式であるとフッサールは強調する。

こうして、フッサール独特の前幾何学的な作業こそは、ふつうの出来上った幾何学にとっての意味の基底となり、理念化という偉大な発明の基底でもあった。

彼が言う自然科学的方法は、直接に経験する直感と、学以前の生活世界の可能的な経験認識とを超え出ている。そして、この方法はある規定された予見をただちに体系的に秩序づけることを可能にしうる決定的作業である。しかし、この数学的な、理念的なものは、アプリオリに想定されたものであるから、未既定の一般性においてあらかじめ仮説として前提されうる。自然科学者は、こうしたフッサール独特の方法化された数学的、理念的なものから、要点的に定式を拾い出し、その定式をすべての人に論理的に必然であるように基礎づけるような技術的方向に向ける。ガリレイの発明でさえも、フッサールから見ると、こうした成功の一例にしかすぎないことになる。フッサールの認識の方法は、どこまでも開かれた見方であり、より多様で、より広く客観的であろうとする。

こうしたフッサールの現象学的な認識の方法は、判断中止によって自然的見方から現象学的環元に変換し、更に現象学的反省によって事実の存在とそのあり様を明確にしようとするのであるが、私はここで、フッサールの方法の発展史の解説を試みようとしているのではない。問題を限ろう。フッサールの「学」とは、一体何なのか。そして彼の哲学の発展的変容のうちに、その「学」は最後に何を意図していたのか。

さて、もう一度、フッサールのガリレイ批判から、ガリレイとフッサールの共通点を考えてみよう。

まづ、想起しておかねばならぬことは、ヨーロッパの学問の歴史で、ガリレイはアリストテレス以来、始めてアリストテレスを否定転回しうる新たな学問を提出した人であったと云うことである。「学」の創始者をアリストテレス、ガリレイ、デカルト、カントとニュートン、集合論の矛盾とフレーゲ、ペアノおよびラッセル等の仕事、そしてフッサールという系列に辿ってみると、ガリレイの見出した「学」の転回点は、決して見のがしえない重要な曲り角であったことは、何人も否定できない。

ガリレイを実験とその数学的証明による自然哲学者とすると、フッサールとの共通点は、両者ともに数学とその証明手段をもっていったことである。ただし、ガリレイは測定の

## 事実からの出発

数値計算と数学的思考方法を表面に出しているのに反して、フッサールは初期の算術の哲学以後は数学を普遍的形相を捉える本質学の典型として思想の奥にしまいこんでしまっ  
て、絶えず出し入れ自由にして現象学的還元と対比させていることである。また、ガリレ  
イの仮説は直ちに証明につらなる仮説であるのに、フッサールは仮説を理念として *cogito-*  
*cogitatum* の相関関係の反省に応用しようとした点に特色があると言えよう。

次に、フッサールはどのように、事実を「学」の中へとり入れたであろうか。

晩年の「ヨーロッパの学問の危機と先験的現象学」の中に見られる彼は、デカルトがコ  
ギトだけにしか認めなかった明証性を、我々の主観性、ある意味でのドクサそのものの中  
から、明証性をとり出して行こうと努力する野心的な方法を提出している。しかし、それ  
はデカルトのコギト、エルゴ、スムのように一挙に原点に達するような仕方ではない。そ  
れは常に過程的であり、段階的にしか遂行されえない。その意味で絶えず意味構成の妥当  
性を変更したり、訂正したりする。また、不明の地平を絶えず残し続けているとも言え  
る。ただ、自明性だけのリアリズムの世界に到達しうる方向と方法を指し示したにしかす  
ぎないのである。

フッサールの哲学も、アリストテレスと共に存在についての学であることに変わりはない。  
しかし、その存在するものが、いかなる意味において、存在すると言えるかを研究するの  
が、現象学的哲学であり、一般的存在論である。更に、そこから個々の事物の哲学的事実  
学も考えられる。(フッサールの「デカルト的省察」と「危機」とでは事実学に多少の意  
味のずれがある。事実学についてのとりあつかい方が、前者では演繹的であり、後者では  
全体として帰納的にとりあつかわれているとも言えよう。)

まず事物の認識から考えよう。事物を認識する我々は、判断中止してその事物を理念化  
しても、視覚、触覚、嗅覚、聴覚、さらに、動きまわったり(遠近法)、そこへ空想を入  
れこんだりして、その都度、認識の一面性を多様化して行く。その都度、認識の一面性の  
背後にかくれた地平を明るみに照らし出して行く。更に時間の指向を入れて、再指向(過  
去指向)、前指向(未来指向)を考えると、物の現れ方は、一層客観化され、より深く捉  
えることができる。

こうして判断中止の後に、具体的な物と、抽象的なものは、次第にノエシス—ノエマ、  
コギト—コギタトゥムの指向性を入れて考え、さらに対象としての存在者の類、種、領域  
範疇からも考察し、また空間的時局的様相もとり入れて経験とか明証性を細かく吟味し、  
更にまた現在の時点が移って行くにつれて、相関関係の *a priori* を具体的に履界するに従  
って、意味世界は形成され、より意味が豊富になって行く。更に、個人の全知覚の調和性  
は、他人とともに生きる間主観性によって、たえず相互の訂正による妥当変移によって、  
妥当の相互主観的調和が成立する。

このようにしてでき上がった「根元的な意味形成」の世界には、当然の結果として二つの  
極が考えられる。一つは、先験的主観の遡及的問いの極として、流動してやまぬ「ヘラク  
イトスの流れ」の自我極であり、根元我である。これはあらゆる記述の根元ではあるが、  
これ自身はもう記述も対象化もできない。この自我極に対応して、その対象極が予想さ  
れ、これも持続するものとして予め潜在的に先取されていると言えよう。その二つの極の  
間に、生活世界に根ざした、総合的に結合した現われとしての主観的なものがある。これ  
を指向性の方から見ると、あるものへの方向(自我極からの)、あるものの現われにおけ  
る統一(先験的主観性)、およびその現われを通じて自我極の指向がそこに向うものとし

## 事実からの出発

ての対象的なものが考えられている。この対象的なものを、志向性 (*Intentionalität*) の相関関係を入れて明証性にもたすことが、フッサールの存在論と言えよう。

さて、次に、デカルトとカントとフッサールとの「学」の差違点である。

解析幾何の発見者としてのデカルトは、ガリレイの実験による証明を更に人間が自然に対する見方全体に拡張し普遍化することができた。デカルトの「学」はこのように方法の発見と方法による普遍的な認識であった。哲学の方でも、コギトースムの明証性から、形而上学をも演繹的に推論しようとする。懐疑論を一步こえて、コギトを積局的にとりあげることによって、ドグマに縛りつけられた認識に合理性を呼びもどすことにデカルトは成功したといえよう。

フッサールは、「デカルト的省察」の中では哲学的省察の模範としてデカルトを称えながら、デカルトのコギトの存在論に指向性を入れて、コギト、コギタティオ、コギタトゥムに分析し、先験的主観性の我思うと、我在りの経験領域をとり出し、先験的自我の自己構成の問題を明らかにし、更に相互主観性と環境世界の間の関係を解明している。「危機」の方でも、純粹自我を体系的に追求し、何がその作用、能力に固有なものであるのか、何かそこで指向的なノエシスとしてなしとげられるかを問うと言う課題を見のがしたデカルトの哲学史的位置を指摘している。

カントの「学」は、周知のように、感性与悟性に *a priori* の形式性と範疇を入れ、理性に二律背反の暗礁の存在を教えて、人間の認識が確實性を保持する方法とその限界を確約した点にある。フッサールはカントの先験性を拡張すると共に、カントがいいあらわしていない前提としての生活の環境世界を究明している。根元的に明証的な生活世界は、今迄の哲学史が自明のものとして客観的な合理的な学としてとりあげようとしなかった。生活世界の問題こそ、むしろ哲学的な普遍的問題であるとしたフッサールは、ここに個人的な思いなしとされているドクサを理性的なエピステーメ (学的認識知) へもちこむ新たな学を導入しようとしたのである。

## 4

具体的な事物または事実であれ、抽象的な事実であれ、これを判断中止によって先験的主観性の中にとり入れ、偶然的な要素をとりのぞいて、できたら必然性の真理の世界としての形相的還元まで到達させる現象学的還元と反省は、我々が出発点で述べた事実から哲学を始める方法に最も近い哲学であろう。更に誰でもが意識していながら、生活世界の哲学の前提としての自明性に注意しなかった点を強調する点、ドクサをドクサのままに客観性に到達しようとする認識の方法の発見など、我々の事実から出発しようとする哲学に最も近い哲学者を、フッサールの現象学に見出すことができる。またフッサールも言うように、普通の人々でも、日常生活で自分の工作中仕事以外のことは判断中止をしているし、重要な決断をしなければならない時には、人は自然に判断中止をせざるをえないわけであるから、フッサールの判断中止と現象学的還元は何か特別に難かしい特異な哲学者だけがする方法ではないのである。こんな点からもフッサールの哲学は開かれた哲学と言えよう。こうした観点も、我々の事実から出発する哲学に理想的に適合しているように思えてくる。

しかし、いかなる「学」も、それが「学」である限り、哲学史をふりかえっても、自然科学史をひもといても、学の論理体系と合理性は、時代と共に必ず破れ目が生じ、ついで崩壊する。学は形成されると共に、また新たな時代によって崩壊してゆく。フッサールのよ



## 事実からの出発

うに、体系と言うよりは、領域と方法を確立した哲学でさえ、時代の波には打ちかてない。

例えば、フッサーは身体性とその運動を認識の妥当性変更と地平の拡張の中で論及しているが、我々の時代の運動は時間的にも空間的にも、スピードアップし、宇宙にまで広がっている。フッサールの認識の場はいつでも静的であるが、事実もまた時に動的であり、時には事実の突然の訪れが、我々の運命を左右する場合さえある。そして、その事実の突然の発見や現出が、我々の今迄の経験的思惟体験を大きく変更させる場合もあるし、またそこに生れた矛盾の解明が、次の時代の科学の考え方までも変化させてしまうこともありうる。

体系はどんなに完備した体系でも、時代と共に崩れさる。これは歴史と時代が示している。しかし、フッサールの思索の過程は、決してカントやヘーゲルのような意味での体系的哲学とは言えない。それでも、時代の状況の変化は、どうしてもサルトルの政治参加やハイデッガーの不安の実存哲学やメルローポンティの行動への傾斜を招き出す必然性をもっていた。

いや、フッサール自身が、あれほど「厳密な学」の樹立に一生涯の夢をかけながら、その晩年になって、「厳密な学としての哲学は終わった。」（*Die Philosophie als strenge Wissenschaft — der Traum ist ausgeträumt.*）と歎息したと言う。

厳密な学への絶望は、どこから来るのであろうか。いや、「学」自身の理想が、本来時代や歴史を超越して、永遠の真理性を要求しながら、一体何故流動と変易と崩壊と改変を免れえないのだろうか。偉大な思想も英雄も天才もまたその時代の申し子ではあったとしても、単なる時代の状況の推移だけで、永遠の真理性を目標とする学自身が、何故こう変更を強いられるのであろうか。

その原因を、人は外側から方法の側だけに求めたがる。「学」の理想の一つが、ユークリッド幾何学やニュートンの物理学のできるだけ少い公理からの演繹体系であったとすると、その学の真理性を破るのは非ユークリッド幾何の出現と相対論や量子力学の発見を参考に考えてみても、今迄自明とされてきた公理（非ユークリッド幾何学の場合は平行線の公理）が新たな立場から考え直されたり、相対論ではマイケルソン、モーレーの実験が新たな矛盾を呼び出し、量子力学では光の直進と波動的性質の矛盾が原因となっていた。

そうすると、こうした実例からもわかるように「学」の改変や新たな「学」の誕生は、新しい事実の到来や、理論そのものがとりにがしていたり、気づかずにいた矛盾した事実の発見に由来する。それは、元来、理論体系そのものに巣くっていたわけで、必ずしも時代の推移にのみ、原因を探ることはできない。

私達は、こうした観点から、個々の事実から出発して、それを理論体系の「学」に統一しながらそれが再び崩壊して行く原因を、矛盾そのものの解明と、偶然の事実とその理論の究明の方向に向けてみたい。そして、最後に我々に訪れる最も恐ろしい、また人間の生に最も本来的に宿命づけられている死の不安についても、考えてみたい。フッサールの現象学は、私達の事実からの哲学の出発点に非常に聡明な示唆を与えてはくれたのであるが、私達がこれから矛盾そのものの究明と流動出没する事実の出現を考察しようとするのは、フッサールがガリレイを陰蔽する天才と言ったと同じ意味で、フッサールの哲学にもとり残された視座の一つがあったことを我々は指摘できるからである。

数論理の世界で同一律が成立しているためには、形式主義としては、公理系が前提されていないなければならないし、直感主義の立場では拒中律を排した、日常の事象からくみ出した記号の世界の構成可能性が前提されていないし、論理主義としては階層論理による無矛盾の論理操作が、そのまま同一律でもある。

もし数論理の法則性が、日常的な思考の核心的な命題 (Kernsatz) として考えられるならば、そう云う Kernsatz の背後には、現実の事象が当然予想されているはずである。一方でまた、上に述べた公理系や構成可能性や論理操作の規則も予じめ設定されていないなければならない。同一律は、この二つの方向からの謂わば切点上に成立しているのである。

そうすると同一律が同一律として成立するためには、数論理上の立場や方法以前に、事実をどう数論理または論理の世界へ組みこんでくるかの方法論が潜在しているはずである。ここに、同一律の成立以前に、事実との出会い方が問題となってくる。

こうした問題点を始めて認識論に投げかけられた問題性として扱ったのが、外ならぬ Edmund Husserl であった。

在来の論理学では、主概念の分析から述語が生れるか、または大概念、小概念、媒概念の推論上の結び合せ方とその外延が主な問題となっていた。さらに Kant まで拡張しても、先天的総合判断が何故成立するかかが彼の論理上の、従ってまた認識論上の中心問題となっていた。しかし、事実との出会いは、現象と物自体として端的に所与とその背後のものとして出発点に置かれていたにしかすぎなかった。Hegel の現象学でも、Husserl の問題性に対しては古来の哲学と同然であって、そこでは、意識が出発点となって客観的認識への導きの糸となっていた。

私達はここで浩瀚な Husserl の著作のうちから、幾つかの点を、事実との出会い方としてとり出してみたい。周知のように、彼はその Epoché (判断中止) と Reduktion (還元) の方法を通じて、我々認識者を認識構成の源泉へ立還らせようとした。彼は同時代の心理学的方法を代表する Brentano と、科学の認識論を問題にした Mach 等の哲学を総合して、新に厳密な学を出発させようとした。ここで Husserl の意企は広く直感と経験一般の根底を探るためには、判断中止によってえられた現象の対象を正しく認識構成するために先験的主観を noesis と noema の相互連関から明らかにするところにあった。彼にあっては、究極の課題は事実を論理的に基礎づけようとするよりは、前論理的なアプリアリへ立還ることによって、 $\nu\omicron\upsilon\varsigma$  から主観的な  $\delta\omicron\varsigma\alpha$  を排除するのではなくて、却つて  $\delta\omicron\varsigma\alpha$  から逆に  $\nu\omicron\upsilon\varsigma$  への道を打ちたてようとするところにあった。だから彼の哲学にあっては、事象との出会い方と、その広い意味での記述または説明は、そのまま彼の哲学そのものを形成しているのである。しかし、その中から特に認識主体が事実と出会う方法を取り出してみると、一つは原初的に彼の現象学の場に乘せられる現象としての事実とその記述とそこから得られる意味構成であり、次に彼の所謂地平 (Horizont) を媒介として意識対象が絶えず新たに生起してくる地平の解明によって潜在性から顕在性へと運ばれてくるころにも、ある意味での事実との出会いが見出され、もう一つは現象学的還元から形相的還元へ至る一つの方法論としても考えられ、蒐合的、選言的、表明的、関連づけ等の総合定立の過程において、主辞に結びつけられる賓辞がもし十全的に措定された時、各選言肢のどれと結びつくかと云うところにも、一つの事実との出会いを、我々は想定することができる。

## 事実からの出発

このようにして出会われた事象は、現象学的還元とその記述によって、より広い意味での客観的普遍妥当性への方向づけがえられ、更にそこから形相的還元とその解明によって事実の本質が究明され、更にまたその都度各個人に与えられた所与から間主観性の真理をも構成しようとする。

しかし私がこの試論で問題としているのは、決して Husserl の哲学全体を究明しようとしているのではない。いかなる天才も偉人もその時代のもつ問題性を集約して出現し、消えて行く。試みに Husserl の残した課題を Heidegger, Merleau-Ponty, Jaspers, Sartre 等が、如何に変容して受胎しているかを見れば、分ることである。今から30数年前に逝ったこの偉大な哲学者の思想を、我々は、どう現代の課題に変容し、アレンジし、再び方法論化するかが我々の課題である。Faraday の電気の性質に関するアイデアとその記述を、Maxwell が数学的により精密に理論化したような方向への橋渡しの道を、我々も見出すことができないかを探究することが、我々の課題である。

## 6

さて、私達はどうか視点から Husserl の哲学を変容し、20世紀後半の思潮に沿って変革しようとするのか。第一に、Husserl の記述を記号化してみる。その記号化には、Boolean Algebra の記号を使う。第二に Husserl の cogitatum を、単純に情報の意義に変えてしまう。第三に、情報を記号化すると、情報は普通無目的に集菓されることはありえないから、当然決断の行動を導入しなくてはならない。以上のような立場で、Husserl を現代風に変更し、それがもし完全に理論化しえたら、一方で、Husserl 風の記述よりも利用範囲を拡げることができ、一方で現象学的還元より本質直感への方法も、それが適切な見方であるか、どうかを明瞭に見出すことができると思われる。かと言って、もし我々のこの方法が成功したとしても、Husserl の本意は、いろんな意味変容を受けてしまい、或いは彼の志すところと外れてしまうかもしれない。

一体、数学をも彼の大学での専攻とした彼が、何故、記述 (Deskription) を単なる記述のままに止めたのであろうか。恐らく、それは彼の哲学の出発点が、一方で心理学的な Intentionalität (志向性) の分析に多分に傾斜いたして故ではなからうか。心理学的事実を実験心理学のように計量化したのでは、心の内面、認識の根源には到達できそうもない。これが、数学者でもあった彼を、記号化から遠ざけたと思われる。

元来彼の記述は、直感からえられた事象と経験からくる事象を判断中止し記述する。しかもできたら、十全的に記述する。そのために事象群を noesis, noema 両面から規範的、範疇的に規正して、事象に意味構成を加えて行く。このように彼の認識論は、今迄の哲学よりも、より始源的でもあり、より広い視点にたった客観性を持ち、より多様な事象の視界を提供している。

しかも、Husserl 自身が気づいているか、否かに関わらず、弁証法的な認識の要素も、行動的認識の要素すらも、その中に読みとることができる。我々はこの Husserl の哲学の中の隠れた要素を拡大してみようとするのである。とに角、以後、我々の課題では事実との出会いとその記号化が問題なのであって、必ずしも Husserl の認識論だけを問題にしているわけではない。Husserl 哲学を我々の課題の真の認識への基準となる鏡のようにできれば、それでよいのである。

今、cogitatum が十分に整備され、与えられたとして、それを個々の情報群とし、その

事実からの出発

総てを  $X_1, X_2 \cdots X_n$  とし, その結果本質に到達したとする。その本質把握を  $Y$  とする。または, この  $Y$  を本質把握からの一つの決断と考えてもよい。そうすると,

$$X_1 \cup X_2 \cup X_3 \cdots \cup X_n \supset Y$$

すなわち

$$\bigcup_{k=1}^n X_k \supset Y \quad (1)$$

同様にして,

$$X_1 \cap X_2 \cap X_3 \cdots \cap X_n \supset Y$$

すなわち,

$$\bigcap_{k=1}^n X_k \supset Y \quad (2)$$

しかし, Husserl では, 単なる情報の蒐集がそのまま真理に到達するわけではないから, 実際には, 情報の区分分け, その整理, 要素結合の順序探索等の操作が加えられて, 始めて真理に到達できるわけである。実際, 個々の真理の把握とは, 幾つかの命題の平均値的総合と云うよりは, 一つまたは二つの命題の発見的決定的結合から, 総ての他の命題が説明されてくるのであるから, 現実には Husserl の言うように判断中止のままの記述に止まっていて, 記号化, 計量化を拒む場合の方が多いのかもしれない。

ここで我々は Husserl を離れて, 情報と行動だけを考えることにすると, 我々のえた, (1)と(2)の式を, 決断, 行動に踏みきるためには,  $X_n$  の情報が集って始めて行動に踏みきりうると考えたとなると難点はない。

さて次に, 一般的に, 事実  $\rightarrow$  情報探索とその整理,  $\rightarrow$  判断(決断)  $\rightarrow$  行動の process には, 現実には完全な情報をえてから, 必当然的に可能な行動を起すと云うことは, むしろ少ない。

そこで, こうしたことを考慮に入れて, 決断行動に踏みきる時に, 推定上多分の危険を予想した場合の  $\supset$  の記号を  $\rightarrow$  で現わし, 成功率の非常に高い場合を  $\Rightarrow$  で現わすと, 下の四つの式をうる。

$$\bigcup_{k=1}^n X_k \Rightarrow Y \quad (3)$$

$$\bigcap_{k=1}^n X_k \Rightarrow Y \quad (4)$$

$$\bigcup_{k=1}^n X_k \rightarrow Y \quad (5)$$

$$\bigcap_{k=1}^n X_k \rightarrow Y \quad (6)$$

更に行動にも  $m$  個の個々の行動群を考慮して, 一般的に記述すると,

$$\bigcup_{k=1}^n X_k \supset \bigcup_{j=1}^m Y_j \quad (7)$$

$$\bigcup_{k=1}^n X_k \supset \bigcap_{j=1}^m Y_j \quad (8)$$

$$\bigcap_{k=1}^n X_k \supset \bigcup_{j=1}^m Y_j \quad (9)$$

$$\bigcap_{k=1}^n X_k \supset \bigcap_{j=1}^m Y_j \quad (10)$$

事実からの出発

今、ここで、十全な知識をえないで、決断行動を下した人がいて、その人の行動を次の如く記述するとすると（Fは失敗を現わす）、次の四式をうる。

$$(\bigcup_{k=1}^n X_k \rightarrow \bigcup_{j=1}^m Y_j) \supset F \quad (11)$$

$$(\bigcap_{k=1}^n X_k \rightarrow \bigcup_{j=1}^m Y_j) \supset F \quad (12)$$

$$(\bigcup_{k=1}^n X_k \rightarrow \bigcap_{j=1}^m Y_j) \supset F \quad (13)$$

$$(\bigcap_{k=1}^n X_k \rightarrow \bigcap_{j=1}^m Y_j) \supset F \quad (14)$$

ところが、今その成功をうるためには、別の情報源か、別の地平からの知識の System を必要としているとする。そこで、成功をSで現わし、加えられた情報源を $\bigcup_{a=1}^l X_a$ とし、加えられた行動群を $\bigcup_{b=1}^s Y_b$ とすると、

$$\{(\bigcup_{k=1}^n X_k \cup \bigcup_{a=1}^l X_a) \Rightarrow (\bigcup_{j=1}^m Y_j \cup \bigcup_{b=1}^s Y_b)\} \supset S \quad (15)$$

$$\{(\bigcup_{k=1}^n X_k \cap \bigcup_{a=1}^l X_a) \Rightarrow (\bigcup_{j=1}^m Y_j \cup \bigcup_{b=1}^s Y_b)\} \supset S \quad (16)$$

$$\{(\bigcap_{k=1}^n X_k \cup \bigcup_{a=1}^l X_a) \Rightarrow (\bigcup_{j=1}^m Y_j \cup \bigcup_{b=1}^s Y_b)\} \supset S \quad (17)$$

$$\{(\bigcap_{k=1}^n X_k \cap \bigcup_{a=1}^l X_a) \Rightarrow (\bigcup_{j=1}^m Y_j \cup \bigcup_{b=1}^s Y_b)\} \supset S \quad (18)$$

このように、名辞や命題を情報に置き換え、式の中に行動を入れて、在来の真偽二値の代りに成功と失敗を入れて考えると、Hegelとは違った形の一つの「成」(Werden)の論理が新しく出来あがる。

我々の行動の過程を考えると、神のような完全無欠な見通しをもつことは不可能に近いから、実際には幾つかの失敗を繰返した後に、最後に煮つまった形で、最後の決定的行動を考へてから、情報源の方を逆に探索したり、視点変換を強いられたりする場合の方が多い。こう云う理由から、式(15)～(18)が必要になってくるのである。勿論、先にとり残したり、無視していた情報から行動の方法を発見する時も多い。猶、ここでSとは実際には一つの目標達成と云う形で現われるのが、普通であるから、行動の開始以前に既に目標は置かれているのである。

また、Husserl流に本質直感(形相的還元)をもち出してみると、例えば今までのアリストテレス、スコラ的自然学に対して、Galileiは「力」とコペルニクスの宇宙観で本質直感に到達した場合には、与えられている事実は、Galilei以前の人でも以後の人でも変りはないから、命題または情報の基礎条件が変化したと見られる。ここで、Galileiの実験も一つの行動と考えると、Galilei以前の人と彼の力学の誕生後とでは、単に情報や事実に関する知識が不足しているとは考えられない。それはつけ加えられた情報ではない。ここで、述語論理的表現が必要になってくる。Galilei以前に与えられていた力学的事実を $X_1, X_2, \dots, X_n$ とすると、Galilei以前は、(EとGは述語を現わす)

事実からの出発

$$\{(X) \bigcup_{k=1}^n E(x_k) \rightarrow \bigcup_{j=1}^m Y_j\} \supset F \quad (19)$$

Galili 以後の人は個々の事実に対する述語を **E** から **G** に換えたと考えて、

$$\{(X) \bigcup_{k=1}^n G(x_k) \Leftrightarrow \bigcup_{j=1}^m Y_j\} \supset S \quad (20)$$

私達は、重大な決断を下す前には、**Husserl** の判断中止を待つまでもなく、判断や決断をさしひかえている。例えば、結婚や就職の前の状態のように。結婚の場合などでは、判断をさしひかえるだけではなくて、何か決断に踏みきらせるだけの動機づけとなるプラスの要素がないと、決断に踏みきれない。学校の採点式と単によい点数をつけられるだけでは、愛情までは燃えてきにくい。よい人だけでは、生涯の伴侶と決定しにくい。逆にたった一つだけでも心の底を動かす事実があれば、結婚の方に踏みきりうる場合もある。このたった一つの事実を **X** とすると、(**H** は述語を現わす)

$$\{(\exists X) H(x) \Leftrightarrow Y\} \supset S \quad (21)$$

逆に

$$\sim(\exists X) H(x) \supset F \quad (22)$$

と表現できる。

7

**K. R. Popper** は、**Bohr** の相補性の原理からヒントを得て、自然を構成する実体の方に、一種の歪みをもった確率を予想しているが、我々は **Husserl** からヒントをえて、逆に主体の認識の側に一つの確率を考えてみようとする。

今、仮に、直感と経験からとり残すことなく、十全に措定された事実群があって、一定の主語にどの名辞が述語として結びつくか、またはある選ばれた命題にどの命題が結びつくかを考えた場合に、我々は一つの確率の状態にあり、更に次の結合を次々と考えて行く場合には、遷移確率の状態か、確率で言う時系列の状態にあるとも言える。

今、単純化するために、二つの名辞の必然的な結合だけを考えて、一つの主語 **S** は結合すべき述語  $P_1, P_2, \dots, P_n$  を探して、その必然性を求めている。ふと路上で見かけた人は誰であったかを、遠い記憶の中から探している時とか、小説を書こうとしている人が、主人公の名前と性格は決まったが、その恋人や敵や競走相手や味方をどう組み合わせようとしている場合などの例に見られる。前者の場合はたった一人の名前が結びつけられる。後者の場合には、結びつく相手は複数であり、状況も幾つか設定しなければならないが、何れにしても、その選択の仕方小説の話の筋はすっかり変わってしまう。

事実から意味を構成して行く過程にも、我々はこう云う確率の場にいると言えよう。十分に **Data** を揃えて、そこから結論を探している科学者の場合にも、完全に既成概念を捨てたり主観的な見方をさしひかえた場合には、同じような確率の場にいると言えよう。ただ、その **Data** が全然見当はずれの **Data** ばかりの場合もあり、または **Husserl** の所謂 **noesis** の側での反省の仕方が不足であったりする場合もありうる。

私達は不完全な認識から完全な認識に至る過程を重視して、事実、情報、**Data** からの判断形成、意味構成の過程を、操作的、過程的、確率的に考えてみよう。それは、また、現象学的還元から形相的還元へ到達するための一種の方法論化とも言えるからである。

## 事実からの出発

ここで、私達は芸術または美学の例から考えてみよう。

例えば俳諧は、5, 7, 5の語数よりなる。誰でもが知っているように、日本語の字母を48とすると、俳句の全可能性は、「ふるいけや、かわずとびこむ、みずのおと」の各字の位置に48字が入りうるから、 $48^{12}$ となる。これは殆ど無限に近い数字である。しかし、実際には最初の5文字、中の7文字、最後の5文字は、ある意味形成の目標以外には字は並べられない。しかも、各シラブルも、俳句全体も、一つの美の究極目標によって制約されているはずである。そこにわび、さび、しおり等々の理想の美の典型が創作過程を制約し続けている。**cogitatum**としては主に単語とその組合せを選択しなければならぬし、**cogito**の側では意味形成の過程でわび、さび等について反省しなければならない。

これを絵画や音楽の場合に拡張して考えると、謂わば情報源と言われる線、形、色、或いは音階と音の長さ、その流れとしてのメロディ、和声の組合せなどは、更に複雑になってくるが、一度で無限に近い選択の場にいることと、美の法則（絵画ではメチエ等、音楽では作曲法等）に制約されていると云う点では同然である。こうした場合、我々は、出来上がった数学理論としての確率論ではなくて、より始源的なカオスに近い確率の偶然性から、美の世界を創り出して行くと言えよう。

音や色にも、ある種の意味形成を考えると、ここでも **noesis** と **noema** の相互関連に制約されて、「意味」は形成されてくる。但し、通常の真理と違う点は、一般の真理はノエシス、ノエマの反省と経験科学に制約されているのに反して、芸術の場合では **noesis**, **noema** 的反省と美の掟に従っている点に違いがあるだけである。

これは、いずれも、大きな三つの方向から条件づけられた、より根元的始源的な確率状態に、人は創作の場合に直面していると言えるが、記号化も計量化もしにくい。

が、実際には芸術家は、無限の偶然性に直面して創作する場合はむしろ稀で、(偶然性の音楽のような少数の例外は別として) 始めからその芸術家固有の美の本質把握を方法化してから創作する。セザンヌの画や、モーツァルトの音楽は、その人独特の美の本質把握があるから、独自の芸術が生まれたと言えよう。

そこで、我々は前に述べた主語にどの賓概念の群の一つが結びつくと、普遍的な命題になるか、またはある命題とどの命題群からの一命題が結合されると必然的な意味が構成されてくるかの問題にもどってみよう。芸術の場合には、観客や聴衆の立場からのある種の客観性が要求されているが、認識の場合では、更に広い客観性と真理到達に至るための本質把握が必要とされる。

自然科学者がある原因とある結果を因果律として把えるためには、場を想定している。場が本質なのである。勿論、ある不確かな原因と結果の因果律を把えようとしている場合、操作的にどう云う空間を選択しようか、どう云う場(例えば、古典力学の場、熱力学的な統計力学的場、量子力学的な場、相対論の場等々)から因果律を考えようかを、くまなく見廻しているわけである。

これと同じように、重大な意味構成の場合には、我々は操作的に、くまなく条件群の方をも見渡して、与えられた二つの命題や二つの名辞を結びつける。例えば、二つの命題の結びつきの普遍妥当性や必然性を、**cogito-cogitatum**の両面から、**noesis** 的反省、**noema** 的反省、それらの指向的流れの諸様式、類型的地平、およびその地平の含み、また経験科学の実例に当てはまるか等をくまなく(**Descartes**の方法論序説のように具体例を投挙するのではなくて)条件づけの仕方の方を見廻すことによって、最も必然的、体系的な結びつ

## 事実からの出発

きを、幾つかの結びつける対象の命題の中から次々と選び出し、結びつけて、必然性を成立せしめる可能性を全部想定しつくす。そこから最後の判断に到達する。判断中止とは、決して最後まで判断中止のままではないので、**cogitatum** の全体の統一的構成から最終の意味形成では、むしろ人は判断こそ目標としているのである。特に **noesis** 的な反省と地平的思考、幾つかの条件投入とその変更の操作と視点変換の繰返しの操作、これを、私達は本質把握への操作的過程として、偶然性から必然性への道として、あげておく。

今、上の操作的認識過程を、集合論的に考えると、ある条件に適った事実群の集合を考え、別の条件に適った事実群の集合を考え合わせると、二つの集合の交わりが求むる二つの条件をみたす事実の群と言えることは、言うまでもないことである。こうして幾つかの条件を満たす集合の交わりを求めることができる。

## 8

**cogito-cogitatum** の相関関係から出発する点では、**Husserl** は **Descartes** 的明証性を強調しながら、**Husserl** の認識がその対象に関して、いつでも完結的で完全な意味把握に到達しているわけではない。例えば、彼の地平 (**Horizont**) と云う言葉が示しているように、寧ろ、過程的であり、未完成であり、操作的でもあり、完全な認識に到達する方法論の闡明である。

地平とは、あらかじめ描かれた潜在性であると彼は言う。意識の対象は、決して完結的所与として現前しているのではなく、たえず新たに生起してくる地平の解明によってはじめて明瞭にされる。あらかじめ描かれたものは、未規定でありながら、規定性の構造をもっている。

更に、**Husserl** は、知覚に与えられた所与の構成の統一としての具体的な現実を、最初の世界と呼び、次に身体以外の環境世界の最初の対象から、我々の身体と他人との世界に関する認識を構成した世界を、第一の世界の次に考察している。こうした **Umwelt** の認識では、意識を根元的に統一するヘラクレイトスの流によって、身体の運動を通して物は理解される。ここでも認識は過程的でもあり、操作的でもある。

さて、上のように **Husserl** の認識が暫定的、過程的だとすると、今、与えられた物の総体を  $\Sigma$  として、

$$\Sigma = f(x_1) \cup f(x_2) \cup \dots \cup f(x_n) = \bigcup_{k=1}^n f(x_k)$$

としたとしても、ここで物を述語づけている  $f$  は、可変的なのである。述語  $f$  もまた順序づけを必要とし、それは、その都度地平が明らかになるにつれ、または、身体の運動や大きく旅行などを通して、述語づけは変化して行く。 $f$  は単数とは言えず、 $f_0, f_1, f_2, \dots, f_3, \dots$  と変化して行く。運動や旅によって、我々はより広い物の系列を知ると同時に、それは今迄与えられた所与の述語の質をも変化して行く。述語づけとは、物の規定の仕方以外ならないから、意識の相関項に注意することによっても、意識対象の意味も変りうるし、まして、体験、空想、直感によって、構成される物の総体としての世界の意味形成も変化しうる。

こうして、我々は、一箇の物  $x$  についても、その総体的統一体  $X$  にも、述語づけの系列を考える。

$\dots f_4(f_3(f_2(f_1(x)))) \dots$  または、 $\dots F_4(F_3(F_2(F_1(x)))) \dots$  と。



## 事実からの出発

また或いは、同一の主語  $x$  について  $f_1(x)$ ,  $f_2(x)$ ,  $f_3(x)$ ……の系列をも考えられる。

しかし、もし我々が、これ以上述語づけの質はありえないと云うような本質把握に到達しえたとしたら、今迄の述語の系列は、総て御破算にして、定まった一つまたは幾つかの述語に到達しうるわけである。

このようにして、私達は、述語づけの作用そのものも、また系列的、過程的、操作的に考えることができる。我々の認識は、こうして、ある意味で、弁証法的発展を予想しうるものであり、Ego の中心が現定できないヘラクレイトスの流れであると同時に、述語づけの方も、またつねに新たな述語づけを待つ、一つの系列の流れと考えるるのである。

同一律は、このように考えると、一体、静止しているのであろうか。判断中止においては、命題と命題、名辞と名辞は、関係づけられずに休んでいる。現象学的還元では、それは本質把握に至る操作的イコールにしかすぎない。それは実験仮説の性格をおびる。本質直感の形相的還元でさえも、内包的、外延的両面から、地平が明らかになるにつれて、より本質的な同一律を予想することができる。こうした発展を、我々は科学史上に容易に指適しうる。

そうすると、同一律が一見静止しているように見えても、それは丁度、非常に早く動くコマが静止しているように見えるのと同じかもしれない。それを支えているものの究明は、いつでも疑問のままに残されているだけにしかすぎないのかもしれない。

(September 30th, 1970.)

## 参考引用文献

1. E. Husserl : *Husserliana* (Edmund Husserl Gesammelte Werke) Bd. I~Bd. XI, 1963. 特にそのうちの Band VI の *Die Krisis der Europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*, (細谷恒夫編集, 世界の名著, ブレントラーノ・フッサールの中の「ヨーロッパの学問的危機と先験的現象学」)
2. *Philosophy and Phenomenological Research, A Quarterly Journal, Volume I*, (1940-1941) および *Volume 2*, (1941-1942) の中の Husserl および彼に関する論文
3. Jean Brun : *Aristote et le Lycée*, (Collection, Que sais-je? No. 928)(文庫クセジュ有田潤訳, アリストテレス)
4. E. Husserl : *Logische Untersuchungen, Erster Band*, 1928. (立松弘孝訳, 論理学研究 I)
5. E. Husserl : *Cartesian Meditation : an introduction to phenomenology*, translated by Dorion Cairns 1960.
6. L. Landgrebe : *Philosophie der Gegenwart*, 1952. (細谷定雄訳, 現代の哲学)
7. J.M. Bochenski : *Die Zeitgenössischen Denkmethoden*, (国嶋一則訳, 現代の思考法)
8. Pierre Thévoz : *De Husserl à merleau-Ponty, Qu'est-ce que La Phénoménologie?* 1966. (丸山静訳, 現象学の展開)
9. *Merleau-Ponty et autres auteurs ; Problèmes actuels de la Phénoménologie*, 1952. (高橋充昭訳, 現象学の課題)
10. P.N. Bohr and other authors ; *Albert Einstein : Philosopher-Scientist*, 1949. (そのうちの部分的訳, 林一訳, N. ボーア他, アインシュタインとの論争)
11. G. Rodier : *Quelques remarques sur la conception aristotélicienne de la substance* (Études de philosophie grecque, Paris, 1926.)

事実からの出発

12. E.Husserl : Logische Untersuchungen. Erster Teil:Prolegomener zur reinen Logik. 1900.  
(立松弘孝訳, 論理学研究 Ⅰ)
13. E.Husserl:Die Welt der lebendigen Gegenwart und die Konstitution der außer leiblichen Umwelt, 1946. Philosophy and phenomenological Research, Volume VI. p.323ff.
14. Von Hermann Schmidt; Der Horizontbegriff Husserls in anwendung auf die ästhetische Erfahrung, Zeitschrift für philosophische Forschung, Bd 21. Heft 4. S.499ff.
15. K.R. Popper:Conjectures and Refutations, (市井三郎訳;知識に対する三つの見方, 市井編, 科学の哲学内の)